広島大学教育学部紀要　第二部　第44号　1995

衝突回避表現として見た方言の婉曲表現

－愛知県北設楽郡富山村方言における婉曲表現の衝突回避機構の類型－

江　端　義　夫

(1995年9月11日受理)

A Euphemistic Expression on the Dialect settled to evade Conflict with Others
－Patterns of evading system on the euphemistic expression of the dialect in Tomiyama village, Kitashitara-gun, Aichi-prefecture in Japan－

Yoshio Ebata

Lately two kinds of definition are seen in the euphemistic expressions. One is regarded as the bending method based on rhetoric. The other is known to resemble the curving line by the theory of Gengokateisetsu. But the author has a different idea with them. He thinks that the euphemistic expression is settled to evade conflict with hearers.

Analyzing the Tomiyama-village dialect, 10 kinds of category in the 4 types of euphemistic group are found in this paper.

キーワード：方言，婉曲表現，衝突回避機構，レトリック，衝突回避表現

要　　旨

婉曲表現についての先行研究には二種類ある。一つは，文章表現のレトリックの観点から曲言法としてとらえるものである。他の一つは，言語の概念化の認識過程で曲線型としてとらえるものである。しかし筆者は，コミュニケーション（会話機構）が方言社会で成立する場を基盤に置き，発話者が聞き手に対して行った関係把握事態の体系的構造をモデル化することを目的とする。婉曲表現を聞き手への何らかの衝突回避機構と想定して，愛知県北設楽郡富山村方言について，II類4型10種の衝突回避機構の枠組みが帰結された。

はじめに

1．目的

婉曲表現とは，方言社会において発話者が何らかの力に動かされて，表現を曲げざるをえなかった事態である。すなわち，タブー（禁忌）となる対象からの衝突回避が，結果としての婉曲表現になると考えたのである。そして，ある特定の言語共同体の中で，発話者と聞き手とのかけひきが言語形式をどのように規定するかについて，一定の衝突回避機構を導き出すことにした。

2．対象方言

愛知県北設楽郡富山村の方言。1979年8月19日～23日までの5日間の臨地調査資料による。ここは，愛知県の東北部にあり，人口が少なく，高齢者の割合が高い寒村である。

3．先行研究

はじめは，五十嵐力のレトリックの立場が注目される。氏は明治42年に修辞学の流れで婉曲表現をとらえ，「主として朧化の原理に基ける詞姿」として，三つのスタイルを指摘した。すなわちそれは，次のとおりである。

①稀薄法「人の感情に鋭く中たる事物を薄く，淡く，ほかして写すものである。」

②美化法「美しい事物にせよ，或は美しい事物を附加して事物を美化する詞姿である。」

③曲言法「背感の事物を和らぐる為に言をくねら

せて遠回しに言ふ詞姿をいふ。」

五十嵐力氏の考え方を継承したのは，市川孝氏である。市川氏は婉曲表現を「断定的に直接的にまた露骨に言うのを避けて，遠回しに表現すること」だと言う。この考え方は，今日の一般の見方と一致するものである。

しかし，これとは全く違う観念による見方が時枝誠記氏によって提示されている。すなわちそれは，言語過程説に基づいて言語の線条性を重視し，次の4つに分類し，特に②が婉曲表現に当たるとするものである。

①直線型　（a ⟶ b ⟶ c ⟶ d）
②曲線型　（a ⌒ b ⟶ c ⟶ d）
③屈折型　（a ∧ b ⟶ c ⟶ d）
④倒錯型　（a ∽ b ⟶ c ⟶ d）

ところで時枝氏は「語の美的表現」の叙述中で，上のようなモデルを打ち出し，aからbへの認識過程の順序に従って，「具体的事物」→「概念的把握」→「音声的表出」→「文字的記載」へと，a～dに辿るのだとされる。

以上の諸説の問題点の一つは，それらが文章を書いたり美的表現に必要な構造形式を導くことが目的とされている点である。しかし，方言の生活における婉曲表現は決して「美的観点」が根幹にあるわけではない。方言生活においては，「折り合いのよい関係の保持」が内在律として働いていると考えるのが，説明原理としては妥当なはずである。

4．筆者の立場

方言社会における発話は，全て，対人関係の帰結事態である。言語生活の円滑を目的とした表現の諸相が交叉しあっているのであって，決して美的な技巧の世界ではない。そこで，婉曲表現事態には，婉曲せざるをえなかった必然性が当該社会に存在するものと見なして，それらの衝突回避機構を言語形式の特徴の動態として記述することにしたのである。

以下では，富山村方言を例にして，婉曲表現すなわち，衝突回避表現に内在する衝突回避機構を探し出して模式化し，具体例に即して説明してゆくことになる。

※　※　※　※　※

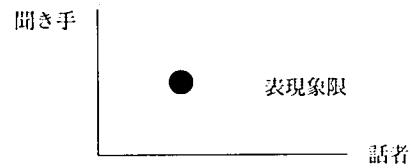
Ⅰ．非婉曲表現（非衝突回避表現）

当該方言全体の表現体系を考慮して，この項目が設定されている。たとえば，次のとおりである。

○ソレ　ワシンダ。それは私の傘だ。老女→同，1979．8．21

こういう文表現は，相手への気遣いの文飾もなく，文末詞（話繋詞）も見られず，必要最小限の語句の連続体でしかない。これなどを，非婉曲表現の一つと見なしておきたい。

これをモデルで，次のように表す。



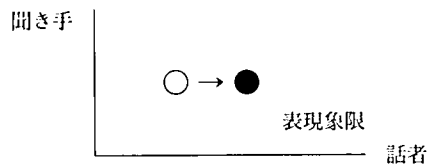
これは話者と聞き手との双方から等しい位置に，まぎれもない事象が「表現」として，実物大の質量で共有されることを表している。ここには婉曲はないのである。もっとも婉曲ではないということを立証するのは困難だが，少なくとも表現に衝突回避の意図を汲むことは不可能である。

Ⅱ．婉曲表現（衝突回避表現）

方言会話において，相手との社会的な関係の中で，婉曲という衝突回避表現がなされる。それらの調節のしかたに4つの型が見られた。以下にそれを，記述する。

1．ズラシ型（客観衝突回避型）

これは，相手への当たりを弱めることを意図して，控えめな言い方に変えたり，質問文形式に変えたりするものである。方言生活に限らず，日常の言語生活では極めて普通のこととして行われている表現技法である。これをモデルで示せば，次のようになる。



ズラシ型に今のところ，5種類の実例を見出している。順にそれらを説明していく。

a．主観の客観化

［ト　オモーカ゜］
○ワシンダト　オモーカ゜　ネー。私の傘だと思うがね。老女→同，1979．8．21
［ト　オモー］
○ソー　イッテモ　ヤットカント　イカント　オモーネ。そう言ってもやっておかなくてはいけないと

思うね。初老男→筆者，1979.8.21

［ト　オモッテモ］

○ナンセツエ　ハイラッカト　オモッテモ　イカレンダー。南設楽郡へ山越えして入ろうとしても，行かれないんだ。初老男→筆者，1979.8.21

発話者の判断の表現に，文末で「～と思う」という言語形式を添えるのが一つの大きな特色である。すなわち，発話内実が聞き手を圧迫しないようにと配慮して，その発話は私的で個人的なものなのだ，というイメージを前面に出すために，「思う」などが引き当てられている。

b．質問文形式化

必ずしも，質問文にしなくても意味が通じる場合において，当該文が質問文の形式を取り込むことがある。たとえば，判断文が途中で，質問文に改められたり，疑問詞の挿入が見られたりする。

［ジャ　ナイー］

○ヤマワ　フユ　ヤッタジャ　ナイー。椎茸作りなどの山仕事は，冬季にやったのではないかしら。老女→筆者，1979.8.21

［ジャ　ナイデス　カ］

○タバコオ　ヤル　ホドノ　コーチカ゛　ナイジャ　ナイ　デス　カ。土地が狭いので，煙草を作る程の耕地が無いですよね。老女→筆者，1979.8.22

［ダチャカンジャ　ナイ　カ］

○ソンナ　コト　シチャー　ダチャカンジャ　ナイカ。そんなことをしてはだめだよ。初老女→筆者，1979.8.19

［アカ゛ラマイ　カネ］

○イッショニ　アカ゛ラマイ　カネ。一緒に上がりましょうよ。老女→同，1979.8.21

［マカー　カト］

○マカー　カト　オモッテ　ネ。種を蒔こうかと思ってね。中女→筆者，1979.8.23

以上の文例には，質問文の言語形式が含まれている。奥ゆかしさを醸し出すという，日本語での共通の表現性がうち出される。ここでは，質問文形式の深さや妙味を感じさせてくれる。質問文形式は，質問の意味を担わないで，発話者の主張を軟化させる効果を生み出している。

c．「は」モダリティーの介在する打ち消し形式

直接形で打ち消したり禁止したりするのではなく，係助詞の「は」を挿入して発話全体を取り立て，聞き手への微細な対応に注目するやり方がある。直截に言い放つのとは違って，懇ろな感じが生まれる。

［ヤッチャー　イカン］

○ソリョー　ヤッチャー　イカン　テー。それをやってはいけないよ。老男→老女，1979.8.20

［アリャヘン］

○コクミンネンキンワ　アリャヘンシ　ネー。国民年金は無いしね。初老女→筆者，1979.8.21

○ニジッキロモ　マットモ　アリャヘン　カ。20キロメートルも，それ以上もありはしないか。初男→筆者，1979.8.19

［セヤ　セン］

○ホンナ　ムチャ　セヤ　セン。そんな無茶をしはしない。初老女→筆者，1979.8.21

［アケ゛リャ　セナンダ］

○アケ゛リャ　セナンダ。あげはしなかった。老女→老男，1979.8.20

［ヤットラセン］

○ヤットラセン　カネー。やっていないかねえ。老男→筆者，1979.8.21

［ノミタカ　ナイ］

○ホンナニ　ヨーケ　ノミタカ　ナイ。そんなにたくさん，飲みたくない。初老男→筆者，1979.8.21

以上の諸例には，みな「は」が挿入されている。「は」には，話者の主観が，懇ろに込められる趣がある。直截に，否定が否定のままに表現されるのを回避して，すなわち衝突するのを避けて，代りに内実を主題化（「は」で包みこむ）して持ち上げるのである。こうして，話者が積極的に乗り出してきている様が，「は」の使用の中に読みとれる。特に否定の物言いに際しては，「は」に神経を集中させている。

d．心的態度の助動詞に係わる作用

助動詞の中でも，話し手の心的態度に係わるもので，しかも婉曲表現の成立にあずかるものをとりあげる。

断定の叙述で措定できるところを，推量形式で言い替えたり，比喩表現形式に仕立てたりすることがある。それらは，大きく婉曲表現の枠の中でとりあげられる。

［ラシー］

○トラレチャッタラシカッタ　ネ。譜面台をとられてしまったらしかったね。初老男→筆者，1979.8.21

○オンナシューモ　イッタラシー　ニ。女衆も行ったらしいよ。初老女→筆者，1979.8.21

○タイシノ　ブカデ　キタラシーカ゛　ネー。大師の部下として来たらしいがねえ。初老男→筆者，1979.8.21

上の3例では，「ラシー」の前部形態素で，すでに事柄が述定済みであり，「ラシー」以下の部分で，話者の主観的な心的態度が措定されている。このような話者の推量表明の態度が選択されたところに，断定と比較したときの婉曲の意味が読みとれるのである。

［ミタイ］

○チョーカンヤマ　チューシャジョーミタイニ　ナッツッツ。鳥瞰山が駐車場みたいになってしまった。老男→筆者，1979.8.21

これは比喩で，直喩とされるものである。広くは，類似のものと重ねて特徴をとらえようとするものである。

二つのものを比べることは，双方に相違があることを前提にしている。その上で，ズレを認めつつも，似ているとするのである。

［ヨーニ］［ヨニ］［ヨーナ］

○ハゼヤスイヨーニ　デキトルダ　ネ。はぜ易いようにできているのだね。初老男→筆者，1979.8.21

○カワイサダケデ　キョーイク　デキンヨーニ　ナリャヘンカ　シラントモー。子供を可愛さだけで教育できないようになりはしないかしらと思う。初老男→筆者，1979.8.21

○スキ゛サッタ　コトーワスレルヨニ　シテ　イル。過ぎ去ったことを忘れるようにしている。初老男→筆者，1979.8.21

○ナンダカ　タヨリン　ナランヨーナ　キカ゛　シテネー。退職後の仕事が，何だか頼りにならないような気がしてね。老男→筆者，1979.8.21

上の例の述部では，相当に慎重な話者の心的表明が見られ，注目される。「ヨーニ」「ヨニ」「ヨーナ」以下の部分には，話者のもどかしさがよく表れている。心象風景を，別の所へ移して眺める風情なのであろう。

○ワカランヨーナ　シコ゛トー　ヤットルンダカ゛……。退職後には仕事と言えぬような仕事をしているのだが……。老男→筆者，1979.8.21

自虐的な言い方ではあるが，「ヨーナ」の後に諦めにも似た卑下の心境が述べられていく。ここに婉曲の表現が，ふさわしく機能している。

e．推想の表明

客観的な文では，事実が中心となって話者の思いと関係なく叙述されていく。しかし，途中で一旦主観的な心情が介在すると，文末部分が揺れ動き，ズレが生じることになる。

ここでは，「ダラー」「ツラ」だけをとりあげる。

○ヘーキンシテ　ソノ　クライワ　モットルダラー。平均してそのくらいの畑は持っているだろう。老男→筆者，1979.8.22

上の例で「ダラー」は「ダロー」よりも新しさが感じられ，気取って表現されている雰囲気が窺われる。

［ツラ］

○ソートー　エラカッツラ。子供に仕送りする親のくらしは，相当に苦しかったであろう。老男→筆者，1979.8.21

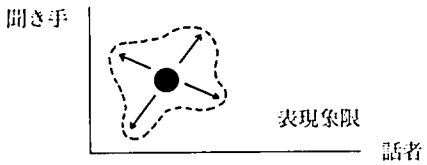
上の例で「ツラ」は過去の推量を意味する。また，そのような心的態度を表明しているのである。

以上で，客観衝突回避表現としての「ズラシ」型を解説した。

2．ボカシ型（実態衝突回避型）

直接に言い表すのではなく，何らかの方法を用いて朧化したり，複数化したり，断言を避けて別の言い方に改めたり，いろいろの工夫を凝らして表現を薄めたり不確実にする作用が，ここで問題になる。このボカシ型は，記述される事実に手を加えて幻想のベールで覆いかくすことである。科学的であるよりは，情念に訴える世界の言語事実であるとしなくてはなるまい。

ボカシ型をモデルで示せば，次のようになる。



ボカシ型には，少なくともａ～ｃの３種類が見いだせる。

a．単複交替

［アンタンタ］

○アンタンター　コトバガ　ワカル　ネー。あなたは富山村の方言が分かるんだねえ。老男→筆者，1979.8.21

上の例で，筆者は一人なので，「アンタ」で良いはずなのに，複数形で対応している点が注目される。

○オヤタチ　エライ　メ　シタダ。親たちは大変な苦労をしたものだ。老男→筆者，1979.8.21

○アノ　シューラー　イチマン　ニマンエンジャネー　カイ。木を切り出すあの人達は，日当が１万円か２万円ではないのかい。初老男→筆者，1979.8.19

複数形を用いた方が，敬意が高いのである。論理ではなくて，丁寧さのために文法上の複数概念が使われているのである。

b．曖昧化

話題の事柄が集団や群れの中の一つの事柄にすぎないのだという発想へと導かれる。そのように目立たなくさせることによって，婉曲効果を得るのが，この曖昧化の特色である。

［ナンカ］

○アキナンカ　アイナンカ　ヨー　トレタ　ノ。秋には鮎がよく採れたのよ。中女→筆者，1979.8.20

○カシノ　キナンカ　ヨー　ハエタ。山には樫の木がよく生えた。初老男→筆者，1979. 8 .21

○ハタラキ　デタ　ホーカ゜　ネー。アノー　オンナノ　シトナンカ　アノ　トシオ　トッテル　シトワ　ダメダカ゜。働きに出た方がね。あのう，年をとっている人はだめだけれど。老男→筆者，1979. 8 .19

○アノ　ウチノ　コドモナンカ　キョーイン　ナッタバッカン　トキニ　アスコエ　イソノッチ　トコエ　マワサレタモンデ……。あのう，家の子供は，教員になったばかりの時に，あそこへ，磯野という所へ回されたから……。老男→筆者，1979. 8 .19

○フネデ　モクタンナンカ　カエリニニ　モノワ　ツメタジャ　ナイデショー　カネー。船で木炭なんか川下への帰り荷として，物が積めたのではないでしょうかねえ。老男→筆者，1979. 8 .20

「ナンカ」には，ものの引用において，わざとらしさが無いだけに，用いられ易かったと思われる。

［クライ］［ク゜ライ］

○アレカラ　クルダモンデ。トヨハシカラ　ヤ゜サイヤノ　クルマカ゜。シューニ　イッカイカラ　ニカイクライカナー。ヤ゜サイ　モッテ　ネー。あれ(豊橋）から来るから。豊橋から野菜屋の車が。週に一回から二回ぐらいかねえ。野菜を持ってね。老男→筆者，1979. 8 .19

○キュージューカク゜ライ　ナル　シッカリ　シタ　オバーサンデ……。90歳ぐらいになる，しっかりしたお婆さんで……。老男→筆者，1979. 8 .19

およその数，概数を述べる例には，実際に知っていても，憚ってわざとおぼめかして言う意図も考えられる。

［バカ］

○ゴケンバカ　アッテ　ネー。畑を作る家が五軒ぐらいあってね。老女→筆者，1979. 8 .23

○ニハイバカツ　チョコット　ヤルダ。晩酌に酒を2杯ぐらいずつ，少し飲むんだ。初老男→筆者，1979. 8 .21

助数詞をうけて，その概数を表したいときに，「ばかり」は恰好のもの言いであったのであろう。

［ヘン］

○アンタ　ドコラヘン　アルイトッタ　ワケ↗。あなた，どのあたりを歩いていたの？小学生女→同，1979. 8 .23

漠然と場所を指示するときに，「辺」が使われる。共通語にも，この手法は見出される。

c．風聞化

婉曲には，その根本に衝突回避の意図があると解釈してきている。したがって，目立たないことが目指されている。そこで話し手は個人的な話題についても，それを一般化して，「世の中での通例の事柄なのだが」などと自己を背後に押しやって前例や風聞に寄りかかろうとする。

［ツッテ］

○シタキ゜リツッテ　ヤットルンデスカ゜……。老後の仕事に山の木の下切りをやっているのですが……。老男→筆者，1979. 8 .19

○サッチャン　キータラ　ブスッテ　サスッ　ツッテ　イッタモンデ　ネー↗。幸ちゃんに聞いたら，ブスッと刺すと言ったものだからね。少女→先生，1979. 8 .23

上の例では，「ツッテ」が「と言って」に相当する。言わば，which they say（世に言うところの）の意味で使用されている。

［チ　コト］［チュー　コト］

○コーバチュー　モノワ　デキンチ　コトダ　ネー。工場というものは出来ないということだね，この土地の都合で。老男→筆者，1979. 8 .19

○カラダノ　タメニ　ヨク　ナイチュー　コトダ　ネ。

上の二例ともに，「できない」とか「良くない」とかの判断を，そのままに表現しないで，「チューコト」「チコト」でうけて，世事一般の都合とか噂になぞらえている。「聞くところによれば云々」の風聞の形式にまとめているのは，なかなか見事な技巧である。

［チュー　モノ］

○ムカシワ　ヨーザンチュー　モノワ　ナカッタシ　ノー。昔は養蚕という仕事はこの土地には無かったしね。老男→筆者，1979. 8 .22

「養蚕が」と主格化した文を避けて，「養蚕というものは」と取りたてて題目化した方が，噂話らしさが際立つ。

［ツッチャー］

○アノ　トージ　ダイガク　ダスツッチャー　タイヘンダッタ　セ↗。あの当時，大学に子供を行かせるといえば大変だったよ。老男→筆者，1979. 8 .21

富山村から子供を大学に勉学に出すなどということは，心労の多いことであり，それこそ，「ツッチャー」でうける風聞にふさわしい。

［ツー］

○タケオサッツー　ヒトカ゜　オッタ。武男さんという人がいた。老女→同，1979. 8 .21

＊ A man, whose name is Takeo, is there.

＊ Once upon a time, there was a man, whose name was Takeo.

つねに，「ツー」は上の例のように直接表現でなくて，複文構造を形成して，間接的な在り方をとる。それ故に，婉曲表現になっていくのである。

［チュー］

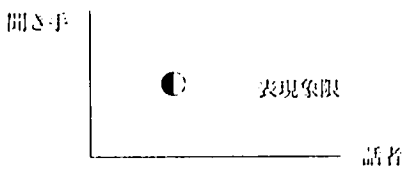
○エーヨーシッチューチューダ　ネー。栄養失調というんだね。老女→筆者，1979.8.20

「チューダ」に引かれて，「失調」が「シッチュー」と発音されている。「チュー」への拘泥が強いからであろう。相手の同意を求める気持ちが，「チュー」にこめられている。

3．ミセケチ型（言いさし衝突回避型）

文を最後まで言い終えないで，途中で言いさすことによって，逆に深い含蓄を醸し出すことがある。これをミセケチ型と言う。

これをモデルで示せば，以下のように円の半分が欠けた形であろうか。



日常会話では，こういう場合が意外に多い。しかも男性の発話よりも，女性の発話の方に一層極立つ。

○ソリャー　サムシー　コター　サムシーダカヨー。富山村は寒村だから寂しいことは寂しいにちがいないんだがね…。老女→筆者，1979.8.21

○ヨッカイチニ　オルッチューデ　ネ↗。四日市に息子は居るというからね。老女→同，1979.8.21

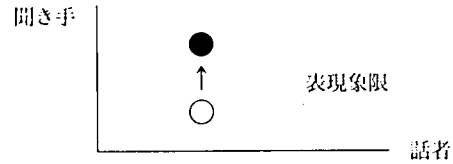
○クルマデ　クルデ　イーケド　ネ。息子はここまで自家用車で来るからいいけれどね。老女→同，1979.8.21

○オーコーチ　トーケワ　フターツ　コサニャ……。大河内，峠は二つ越さねば(行かれないし)…。老男→筆者，1979.8.22

言外の心境を，省略という形式すなわちミセケチ型の表現方法をとることによって，ことばで表現することよりもはるかに深淵な思いを，全体として伝えている。婉曲表現の極限は，おそらく「沈黙」であろうが，それは本研究のさしあたりのテーマではない。その沈黙の手前に，ミセケチ型の表現修辞が存在するのである。

4．モチアゲ型（卑態衝突回避型）

ミセケチ型は話者の側に引き寄せて，言い淀む婉曲の方法であった。その反対に，聞き手に係わる行為については，条件表現で「～したら？」のようにミセケチ型をとることもできなくはないが，別の積極的な衝突回避法をとることがある。それがモチアゲ型である。



上のモデル図では，聞き手に関する動作が持ち上げられる表現機構であることを示している。目下や年下の相手であっても，命令する場面でならなおさらのこと，敬語が使用される。このようにして，相手を持ち上げることによって，ストレートに脅迫する雰囲気を回避し，なごませるのである。

［動詞連用形＋ン］

○ムコーカラ　イキン。プールの向こう側から行きなさい。少男→少女，1979.8.23

○カッチャン　トリン　ヨ。モツ　トキ　ナイ↗ニ。勝ちゃん，浮き輪をとりなさい。持つとき，それが無いよ。少女→少男，1979.8.23

○ココニ　オリン。ここに待っていなさいね。若い母→子供，1979.8.21

上の3例は，ていねいな言い方になっている。同年齢か年下の者への発話であるが，相手に強いる命令形であるために，軽い敬語の「～ン」が使用されたのである。あまりにも高すぎる敬語では，場面にそぐわない。そこで，親愛を表す程度の尊敬語が選択されたのである。

この場合，文法機能の上では，動詞の命令形だけで足りる。それなのに，動詞の命令形を回避して連用形にし，さらに「～ン」敬語を添加した。こうした，モチアゲ型の婉曲表現が，特に聞き手をいたわる技巧の一つとして注目されるのである。

ま　と　め

先述のように，時枝誠記氏は言語過程説に基づいて，言語美論の一種として婉曲表現を「曲線型」の発話と規定した。これに対して，五十嵐力氏や市川孝氏は，文章表現のレトリックとしてとらえて，曲言法を婉曲表現の大体とみなした。

それらに対して筆者は，別の言語観に立つ。すなわち，人間関係での双方が，会話機構（私作）の力学的な関係で，どのように張り合い，かけひきをするのか

という社会関係論として見ることにしたのである。表現機構としては，発話意図との絡みで，衝突回避の対象として何を選択するかによって，婉曲表現事態が決定された。

それらは以下の2類4型10種にまとめられる。

I．非婉曲表現（非衝突回避表現）

II．婉曲表現（衝突回避表現）

1．ズラシ型（客観衝突回避型）

a．主観の客観化

b．質問文形式化

c．「は」モダリティーの介在する打ち消し形式

d．心的態度の助動詞に係わる作用

e．推想の表明

2．ボカシ型（実態衝突回避型）

a．単複交替

b．曖昧化

c．風間化

3．ミセケチ型（言いさし衝突回避型）

4．モチアゲ型（卓態衝突回避型）

以上の記述の枠組みは，今後さらに検討を続けなければならない。しかしながら，なぜ婉曲表現なのかを考える上で，どうしても，話者と聞き手との会話機構を考える視点が必要だと思われたので，蹴案ながら，仮説を提案することになった。

婉曲表現を衝突回避表現と見なして，その内的な表現機構を類型化し，または記述することの重要性は確認されたとしてよい。特に方言を分析するとき，話者と聞き手とを座標軸上に置いて，話者に焦点を定めて表現事実と人間関係との相関を動的にとらえようとする試みは，さらに精密に研究されるべきであろう。

参考文献

1．五十嵐力『縮刷　新文章講話』（早稲田大学出版部，明治42年11月）

2．時枝誠記『国語学原論』（岩波書店，昭和16年）

3．市川孝「婉曲表現」（『国語学大辞典』東京堂出版，昭和55年9月）

参考資料

1．愛宕八郎康隆「日本語方言における比喩語の特徴傾向——方言資料叢刊　第3巻をふまえて——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

2．————「長崎方言における婉曲表現の諸相」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995．4）

3．井上博文「関西城における若年層の友達の呼称——女性から女性へ・女性から男性へ」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

4．————「若年層の大阪弁に於ける南瓜を表す「ナンキン」と「カボチャ」の意味」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

5．岩城裕之「瀬戸内海芸予諸島方言における風位語彙構造の相対性について」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

6．————「広島県安芸郡蒲刈町宮盛方言の個人差」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995．4）

7．生塩睦子「あるコミュニケーション——三百人集団との対話——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

8．————「「きよら」考」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995．4）

9．小田佳代子「学校社会における「先輩」という呼称について」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

10．大橋勝男「コミュニケーション論——諸方言の諸現象に即して——(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

11．————「日本語方言の婉曲表現——京阪系方言と東京方言——」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995．4）

12．神部宏泰「近畿方言における特定の指示・呼びかけ表現について——「見よ」形式の間接用法を中心に——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

13．————「播磨方言における断定辞の推移——断定機能の弱化・軟化のもたらすもの——」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995．4）

14．久木田恵「現代高校生のコミュニケーション——笑う場面に注目して——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

15．黒崎良昭「日本語のコミュニケーション——自称語・対称語について——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

16．佐藤虎男「音調知覚の実験的考察」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

17．佳田幾子「談話の展開にはたらく「すみません」と「どうも」について」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

18．友定賢治「日常会話における談話展開の特徴——固有名詞に着目して——」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994．4）

――――「助動詞「ジャ」から文末詞「ジャ」へ」
19. ――岡山県新見市坂本方言における――」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
20. 灰谷謙二「広島県太田川流域の方言分布」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994.4)
21. ――――「あいさつ表現の分布上の特質について――太田川流域方言の「田畑からの帰り道でのあいさつ」から――」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
22. 町博光「広島県太田川中流域の方言分布」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994.4)
23. ――――「日本語俗語における「あいまい化」への志向性」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
24. 山口幸洋「宮崎県延岡市旧南方村方言の特徴――NHK全国方言資料からの抽出――」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
25. 山根智恵「岡山の女子学生のことば」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
26. 山口豊「程度を表す語について――「ばり」を中心に――」(1995年度方言研究ゼミナール発表資料，1995.4)
27. 吉岡泰夫「話し合いのコミュニケーション方略」(1994年度方言研究ゼミナール発表資料，1994.4)

追　　記

本稿は1995年4月28日～30日に広島県民文化センターで行われた「1995年度方言研究ゼミナール」において発表した草稿を加筆修正したものである。席上，多くの方々から有益なご質問やご助言をいただいた。厚くお礼申しあげる。